木簡の作法と100年の理由

馬場　基

Ⅰ．はじめに
Ⅱ．多面体・棒状木簡の再検討
Ⅲ．韓国古代木簡文化と日本古代木簡
Ⅳ．おわりに

要　旨　　韓国古代木簡で特徴的とされる多角柱・棒状木簡について検討した。木簡の形状・加工と文字記載の方法を観察すると、通常は文字を書写するために「面」を作り出すが、面を作り出さない木簡が存在すること、それらの円柱状木簡で、文字記載行数が多い木簡には共通した加工や形状の特徴が見られる（円柱状で節を有し、長さが20cm強で比較的太い）ことが指摘できる。出土情報や記載内容から、こうした節を有する円柱状木簡木簡が、新羅王の身辺間近で用いられた木簡であり、音声が文字化されるような場面での利用が想定できることを指摘した。さて、このような多角柱・棒状木簡の中における使い分けから、新羅木簡文化の存在を想定し、また対比されるものとして百済木簡文化の存在も想定した。古代韓国に、こうした成熟した木簡文化が存在することを指摘した上で、日本古代木簡との比較を行った。木簡は、行政・支配・収取システムの一環・あるいは道具として機能するものであり、単独で使われるわけではない。木簡の使用は、そうしたシステム運用のノウハウがあって初めて可能になる。日本古代木簡の本格的展開が、韓国よりも大きく遅れるのは、こうしたシステム・制度の整備状況や、ノウハウの蓄積差によるものであると考えた。

キーワード　　木簡　新羅　百済　日本　木簡文化

奈良文化財研究所　都城発掘調査部

Ⅰ．はじめに

近年、出土点数が急激に増加し、研究の進捗も著しい韓国古代木簡は、日本古代木簡を考える上でも欠かせない材料となっている。形態や文字遣いなど、両者の差異や共通性は、多くの研究者が注目しており、日本古代木簡の源流を韓国古代木簡に求める議論が多く出されている[1]。

ただ、これらの議論で比較的扱われていない視点があるように感じられる。それは「木簡文化」という発想である[2]。どのような場面でどのような木簡が選択されるのか。どのように作成され、使用されるのか。そして、それはその場面のどのような部分を形成するのか。端的な例を言えば、紙と木の使い分けの問題であり、支配制度－行政体系や徴収システムなど－のどの部分を担うのか、という様な問題である。

古代木簡は、支配体制の一端を担っていた。徴収をスムーズにかつ確実に行ったり、行政処理や連絡を確実に効率よく行うための「道具」として、木簡は存在していた。木簡は個別に存在するのではなく、木簡を作成し使用する作法とともに存在していたはずである。例えば、口頭の言語で処理をするのか、文字を使うのか。文字を使う場合には、紙を使うのか、木簡を使うのか。文字を使った場合でも、口頭での補足は行うのか。書式はどうするのか。必要な記載内容はなにか。ある目的を達した後に処分するのか、保管するのか。一つの木簡が作成された背後には、こうした選択と決定、それを支えた制度や慣習、つまり木簡作成の作法が広大に存在するのである[3]。

したがって、単に「形態が似ている」にとどまらず、その背後にある作法の差異や共通性に着目することで、木簡の意義や、古代社会はより深く理解することができるようになるであろう。本稿では、こうした問題意識から、日韓の古代木簡を比較することを試みたいと思う。

なお、筆者の語学力不足のため、主として日本語で公表されている研究成果のみ参照しており、本来博捜すべき韓国語での研究成果について十分に取り入れることができなかった。あるいは、本稿で述べることの中には、すでに韓国語での研究が公表されている見解があるかもしれない。この点、あらかじめお詫び申し上げ、御寛恕賜ることをお願いする次第である。

Ⅱ．多面体・棒状木簡の再検討

1　多面体・棒状の荷札木簡

韓国古代木簡を日本古代木簡と比較した際、両者の違いとしていくつかの点が指摘されてきている。それらの中でも、韓国古代木簡に存在し、日本古代木簡では例外的な「多面

体」「棒状」木簡と称される木簡について確認をしていきたい。

日本古代木簡は、板状が基本である。文字は板の表裏面に記載される。板の側面に文字が書かれた木簡も存在するが、板の側面が当初から筆記面と意識されたとは考えがたい。また、角柱状の木簡＝觚も出土しているが、日本古代木簡の中ではあくまでも例外的存在に止まっている。

一方、韓国木簡には觚が多数確認されている。また、荷札木簡も棒状を呈する例があり、文書木簡や典籍にも棒状・柱状の材の例が存在する。こうした点から、板状が基本である日本古代木簡に対し、韓国古代木簡では、棒状の材を用いた木簡の世界の広がりが存在する、と指摘されている[4]。たしかに、棒状を呈する多面体の木簡は、日本古代木簡と比べ韓国古代木簡の際だった特徴ということができる。

しかし、韓国古代木簡の棒状木簡も、必ずしも全て同じ性格ということはできないように感じられる。韓国の多面体・棒状の木簡は、木の髄の部分を有する棒状という点で共通する形態的特徴を持つものの、その形状が選択された理由、本稿でいうところの作法は必ずしも共通しないのではないだろうか。棒状の木簡がどのような場面で使用されているか、その場合どのような理由で棒状が選択されているのかを考えてみたい。

多面体・棒状木簡の内容を検討すると、①典籍、②文書・書状（案文らしきもの含む）、③荷札に分類できる。このうち、①典籍については、論語木簡のように觚の形状をとる。日本で発見されている数少ない觚も、典籍の木簡であり、関連性をうかがうことができよう[5]。

①典籍と②文書・書状は、比較的文字数が多いという点で共通する。筆記面の確保という点からも、多面体を採用した可能性を考えることもできよう。しかし、③荷札に記載される文字数はさほど多くはない。そこでまず、棒状の荷札について考えたい。

棒状を呈する荷札は、咸安城山山城出土木簡中に見られる[6]。しかし、これらの木簡の筆記面は１面もしくは２面である。棒状の形状によって筆記面を多く確保しているわけではなく、板状の木簡と、筆記面は同じである。こうした点から考えると、棒状の荷札は積極的に棒状という形態を選択したのではなく、板状を基本とする体系の中で板状への加工が不徹底だったもの、と理解し得る可能性が指摘できよう。

日本国内にも、棒状を呈する荷札が存在する。福岡県大宰府出土の、『大宰府史跡出土木簡（二）』二一三号木簡である[7]。この木簡は、木簡を幹とする枝が生えていた根本も残っているという珍しい木簡である。使用場面は他の板状木簡と同じである。紫根に付けられた荷札だが、その分量が多いためか、比較的大型の木簡で、こうした大型のものを作る際に、長い板を確保するよりも長い枝を確保し、皮を剥いて筆記面を削り出す方が容易だったため、こうした形状の木簡が作成されたと考えられる。

この大宰府の例も勘案すると、城山山城出土の棒状荷札は、積極的に棒状を選択したと

いうより、板状の代用として棒状の材に筆記面を削りだしたもの、と判断すべきであろう。慶州出土木簡でも、付札で棒状に近い形態をもつものがあるが（173号など）、これも面を作っており基本的には板状の付札の延長にあると捉えることができる。

じつは、こうした棒状の木簡について、韓国の研究者はしばしば「髓のある木簡」という表現を用いている。これは極めて適切な表現ということができよう。日本側で、「髓がある」という材の用い方・形状の特徴を端的に表現したものを、多面体の木簡という内容に読み替えてしまったふしがあるように思われる。この際、板状を志向しつつ「髓がある」付札も多面体木簡と捉えられてしまったのではないだろうか。あくまでも、目指した形態としては板材（厚さは問わない）であり、用いた材が棒であった、という点を確認しておきたい。

2　面を作り出さない木簡

一方、①典籍・②文書・書状は、すべて同じような性格と捉えることができるだろうか。

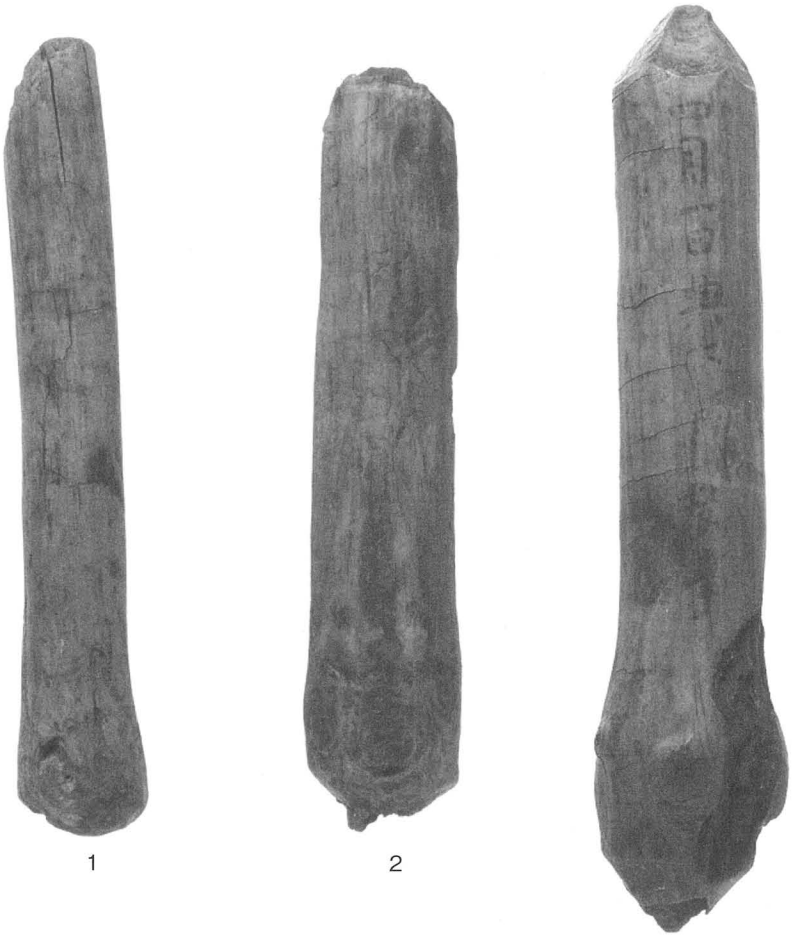
確かに、大型の板材を用いず、多くの文字を記すための工夫という点で、共通する部分も多い。しかし、詳細に観察していくと、すこし気になる点が見つかる。それは、面の有無である。

觚の形状を取る木簡は、４面を確保するために明瞭に面を作り出す。また、３面の木簡でも、面は明瞭に作られる。つまり、木簡は角柱状を呈する。しかし、写真で観察する限り、明瞭な面の形成が見られない木簡が存在する。そのうち、148・152・153号（『月城垓子』10～12号）木簡について、慶州文化財研究所で実見の機会を与えられた。以下、その観察成果を示す（第１図）。

148号木簡は、上端部は半分ほどは材に垂直に加工が認められるが、もう半分は材に対して斜めに切断されたような状態で、下端部は各方向から刃物を入れて整形している。下端部の加工に比べ、上端部の加工が雑な印象を受けるが、本来は平面状に加工されていたと考えられ、斜めの面は欠損とみることができる。上下両端で、極端に加工が異なる事になるが、一応完形品と考えておく。下部に節があり、盛り上がっている。

152号木簡は、上下端とも、髓が飛び出したようになっている。各方向から刃を入れてキリオリしてから、一定の整形を加えたのであろう。上端部分はキリオリ後の整形が粗く、木の繊維が荒れた状況が残るが、下端部は丁寧に加工する。下端部の加工の状況は、148号下端部によく似ている。この木簡も下部に節が存在する。なお、写真では、一見筆記面を平坦に作り出しているように見える部分がある。だが現物観察の結果、筆記後に面取り状に加工されて形成された平坦面の可能性が高いと判断した。

153号木簡は、上下両端とも各方向から刃を入れて整形する。特に上端の整形は特徴的である。円錐状ではなく、角錐状に整形する。なお、角錐の各面は、木簡本体の筆記面とほ



第１図　慶州月城垓子出土木簡（１：２）
１：148号　２：152号　３：153号

ぼ対応している。下端部は円錐状を志向した加工となっている。これは148号・152号と共通する形状である。また、下部に節があることも共通する。

以上の観察からこの３点の木簡に共通することは、

① 文字を書くための面を作り出していない

② 下端は各方向から刃を入れて調整する

③ 下部に節があり、下部の形状がいびつである

④ 全長が20cm強（153号が最大で24cm。ただし筆記面の長さは３点ともほぼ同じになる）

であり、国立慶州文化財研究所『月城垓子　発掘調査報告書Ⅱ』（国立慶州文化財研究所、2004－2006年）の内容を含めると、さらに、

⑤ 出土地点が近接する

という点も指摘できる。

①～④の特徴は、韓国木簡でも他には例が見あたらず、この３点の大きな特徴ということができる。もう少し、この特徴について考えてみたい。

柱状の部分に文字を記している。筆記用の面をもたず、円柱という形状を選択している。多くの文字を記すためには面が多く必要で、その結果円柱状になったという可能性も皆無ではない。だが、典籍も文字数は多いという点では共通するのに、典籍では筆記面を明瞭に作り出している。筆記面の確保であれば、例えば六角柱などの形態も考えられるのに、書写が難しいであろう円柱状を採用している。文章の行数が多くなった結果、円柱状になったという説明はそれだけでは不十分であろう。また、この３点の木簡は全長も比較的短い。もし、記載文字数を増やすことが目的ならば、全長を長くするという方法もあるが、それを採用していない。この点からも、記載文字数を増やすために円柱になってしまった、という見方も不十分であろう。むしろ、この木簡を作成する際に、別の何らかの理由によって円柱状の形態が積極的に選択されている可能性が高い。

すると、円柱の形状とともに、下部に節を有することについても一定の意義がある可能性が想定できよう。また大きさも比較的近い。この３点は、同じような木の使い方によって作成され、同じような形状の木簡として使用されたわけであり、さらに出土地が近接することも合わせて考えると、ごく近接するか、同一の役所で使用されて廃棄された可能性が想定できる。つまり、ある特定の役所で、こうした木簡の使い方・作法（材の選択・形状の選択・使用・廃棄）に基づいて使われたのがこの３点だったと考えるのである。

さて、その役所の特定はなかなか難しい。周辺の官司群の調査の進展をまち、合わせて考えるべき課題である。ただし、記載内容から、官司の特定には至らなくても、使用の場面について一定の見通しを持てるように思われる。

153号木簡では、「典太等教事」の語が釈読されている。典太等という役職は国王に直属する秘書官的な役職であり、「教」という語も国王の意思を示す文言としてふさわしい。この木簡で示されている内容は、典太等に対する「教」というとらえ方と、典太等が「教」を受けて伝える（日本でいえば奉勅宣のようなイメージ）というとらえ方の二通りがあると考えるが、いずれにせよ国王の意思と、それを受けて実現する秘書官が登場する王権中枢部に密着したものと捉えることができるであろう。文中に見える「白」＝申すも、こうした国王の意思とその側近による文字化・伝達という世界を思わせる。148号も、「敬白」等の文言がみえ、153号に近い内容と捉えることができるであろう。

やや様相が異なるのが152号で、薬の名前が読まれている。全体に墨痕の残りが特に悪く、文意がつかめない。どのような文脈で薬品名が登場するかによって評価がわかれるが、形状その他の特徴から、他の二点と共通する場面で用いられた木簡と考えておくことにしたい。

ただし、慶州以外での出土木簡で、すこし問題になる木簡も存在するので、これについて触れておきたい。河南二聖山城出土の119号木簡である。

実物は実見していないが、写真で見る限り円柱状の形状を持つ。一行文字を記し、「五十三」という数字を割書風に右寄せで書く。帳簿もしくは考選木簡のような雰囲気の書きぶりであり、王権中枢部とは直接結びつきそうにはない。

この木簡は、上下が折損もしくは非常に乱雑な加工と見られること、節を有さないこと、が慶州出土の３点とは大きく異なる。全長は18.5cmとされているので、もし慶州タイプの円柱木簡であれば、節の一部でも見あたる可能性が高いが、写真では確認できない。全貌が今ひとつ良く分からないので、何とも言えない。非常に丁寧に円柱状の形状を作っている様であり、あたかも文書軸にメモをしたような印象もなくはない。ともあれ、都城出土ではないことも併せると、慶州の３点とは異なる作法によって作成された可能性が高いであろう。だが一方、こうした形状が他にまだ見あたらないことも合わせると、独自の作法に基づくものとも言い難い。一応、その存在は確認し留意しつつ、今回の考察からははずすことにしたい。

さて、前述の仮説に基づけば、この３点の円柱状木簡は、国王や王権の身辺にちかい場所で、彼等の音声による意思のやりとりを文字化し、伝達する木簡と位置づけることができる。場面や使用方法などが限定された、独特の木簡の作法の可能性が見いだせると考える。

なお、148・152・153号木簡は、おそらくは典太等ら国王に近侍する役職によって作成されたものであろう。また、153号に見える「勺」も「芍」の草冠を省略した字形の可能性があるとすれば薬品に関連するものの可能性があり、内廷における薬品を中心とした管理部局が廃棄元という想定ができるのではないかと思う。

さて、以上韓国の棒状木簡を整理し、以下の見通しを得た。

① 荷札は単に材の都合によってその形態になったものである。表裏を有し、形態と使用法の観点からみると板状木簡と同じである。

② 典籍・文書などの場合、円柱状の木簡が注目される。書写面を平面で作り出さないこの木簡のうち、慶州で発見された３点は王権の中枢に関連する文書で使用されている。

これを踏まえて、章を改め、韓国での木簡の作法と、日本木簡との関わりを考えることにする。

Ⅲ．韓国古代木簡文化と日本古代木簡

1　新羅木簡文化と百済木簡文化

さて、前章での仮説に一定の蓋然性が認められるとすると、この円柱状木簡は現在のところ新羅でのみ確認されている。つまり、円柱状の材を使用する作法は、新羅独特の木簡

使用法、新羅木簡文化の可能性がある、ということができるであろう。そして新羅木簡文化が存在するとすれば、百済木簡文化も存在すると考えることができる。

改めて百済・新羅の木簡を通覧すると、共通したり似ている点が多い。髄を有する木簡は、百済・新羅を通じて多く見られる。文字の書きぶりも、材の雰囲気も、両者で似ているものが多い。そういった観点からすると、百済・新羅がそれぞれ固有の木簡文化をもっていた、とは言えないようにも見える。

また、注意しなければならないのが、いつ頃の、どのような場面で用いられた、どのような性格の木簡が出土しているか、という点である。新羅木簡でまとまった出土がみられる鴨雁池・月城垓子・城山山城の三者をとっても、鴨雁池は８世紀に降る宮廷内部で使用された物品付札を中心とする木簡群[8]、月城垓子は７世紀を中心とする都の木簡、城山山城は６世紀代の山城に運び込まれた荷札である。官司間で使用された木簡群や、都城の荷札などはあまり見られない。一方、百済木簡は、扶余出土木簡は主として官司で用いられた木簡、陵寺跡出土木簡は境界域の木簡である。扶余出土木簡と月城出土木簡にはある程度性格の共通性も見られる様に思うが、基本的には百済・新羅を容易に横断的に比較できるような、性格が共通する木簡群が存在していない。

だが、それでも新羅・百済でどうも木簡の作法に若干の違いがあった様に感じられる。例えば、羅州伏岩里遺跡出土木簡は、材の様相も文字の書きぶり・雰囲気も、新羅木簡とは大きく異なり、日本の木簡に非常によく似ている。八世紀代の慶州出土新羅木簡は、時代も、都城という出土地の性格も日本の平城宮木簡と共通するが、文字の書風や木の使い方など、大きく異なる。しかし、時代も異なり、また遺跡の性格も異なるはずの羅州伏岩里木簡と平城宮出土木簡は、材の雰囲気も、文字の様相も、共通する点が多く見られるように感じられる。

尹善泰氏は、「中国漢代の「編綴文化」、古代日本の「板状木簡文化」に対比される韓国古代の「多面木簡文化」を提唱したい」と述べる[9]。また、多面体木簡は、八世紀以降紙に取って代わられるという見通しも示した。これまでの検討を踏まえてさらに踏み込んで、多面木簡とはすこし様子の違う「円柱木簡」も存在していたらしいことを軸に考えると、韓国古代の木簡文化にもいくつかバリエーションがあり、新羅と百済では共通する面と異なる面があったということができよう。なお、出土木簡群の性格の偏りからすると、八世紀に文書作成の場面で木簡が利用されなくなったという点は、可能性としては十分考えられるが、まだ検討の余地も残されているように思う。鴨雁池出土木簡と、月城垓子出土木簡では時期のみならず性格も異なるのである。

さて、新羅と百済では、それぞれ独自の木簡文化を展開していた、と考えることができるとすると、こうした木簡文化の存在は、非常に重要な示唆を与える。現在、韓国での古代木

簡の出土は1,000点に満たない。日本の古代木簡が20万点を優に超えていることと、大きな違いがある。その理由について、① 発掘調査の進展状況（低湿地の調査を行っているか、など）、② 木簡に利用された材や土壌などの自然的要因、③ 紙の普及による木簡使用数の差、というような可能性が想定できる。

このうち、①の理由の部分は今後の調査の進展によって解消されていくものだが、②と③の理由はいかんともしがたいものであり、もしこれらの理由で韓国での木簡出土が少ないとすれば、今後もそれほど多くの出土は見込めない、ということになってしまう。

②については、筆者の知識ではその当否は判断できない。たしかに、韓国出土木簡には材の状態が良くないように見られるものも多く、松材の多用なども含めて木簡が土中で残りにくい要件もあるようには感じられる。しかし、状態の良い木簡もあることを考えると、②の理由も想定できるが、それでも土中で一定以上の割合で保存されていると思われる。

だが、③の理由であるとすると、点数の増加は絶望的なものとなる。そもそも木簡が利用されていなければ、捨てられる木簡も少なくなり、土中で保存されて残り、発掘調査で発見される木簡はさらに少なくなる。

しかし、もし百済・新羅にそれぞれ固有の特徴があるような木簡文化が存在しているとすれば、その背景には多くの木簡使用が想定されるであろう。木簡をたくさん作成し、使用するからこそ、それぞれ独自の使用法や作成法＝作法が成立すると考えられるからである。また、特に百済木簡でみられる帳簿木簡や伝票に近似するような木簡の存在は、日常的な木簡利用の可能性を示しているであろう。百済では日常的な木簡利用が想定されるから、当然今後の出土も期待される。一方、新羅では百済とは異なる木簡文化をもつほど木簡利用が盛んであったから、こちらでもまたさらなる木簡の出土が期待される。たとえば、これまで、慶州では荷札木簡（貢進物付札）が発見されていない。城山山城木簡の荷札から考えると、慶州に運び込まれた物資に荷札が付けられていなかったとは考えがたい。

なお、この点に関連して、少し補足しておく。三上喜孝氏は城山山城木簡について地方の山城出土の木簡であり、「城山山城木簡もまた、（宮都とは異なる）地方木簡として考える必要がある」という指摘をする[10]。しかし、橋本繁氏が明らかにしたように、城山山城木簡は非常に体系的な収取制度に則って作成された木簡であり[11]、「定型化される前の木簡」ではなく、定型化されて消費地へと運び込まれた木簡である。三上氏が典型的な宮都木簡の類型としていると想定される平城宮出土の荷札も、通覧すると城山山城と同様の書式や形状の多様性は存在する。こうした点から考えても、城山山城木簡は単純に「地方木簡」という括りにはできないであろう。

さて、百済・新羅の木簡文化が存在するとすれば、それらと日本古代木簡との関係もまた存在する筈である。節をあらためて検討したい。

2　韓国木簡文化と古代日本木簡

すでに、韓国木簡と日本木簡の比較研究は多い。その中では、日本木簡でも、都城出土ではなく地方出土木簡に韓国木簡との共通性が多い点などが指摘されている。

本稿で着目したいのは、韓国最南端の地域にあたる城山山城出土木簡が6世紀半ばなのに対し、対岸の日本で木簡が本格的に利用されるようになるのが7世紀半ばで、その差が100年にも及ぶという点である。対馬海峡を渡るのに、なぜ100年もの時間が必要だったのであろうか[12]。

この問いに対しても、いくつかの回答の方向性が考えられる。まず、日本列島にも、現在発見されていない、6世紀代、あるいは7世紀前半の木簡がある、と想定するか、それともやはりそのころには木簡は利用されていなかった、あるいは利用されていてもそれほど多くはなかった、と考えるか、という二つの方向がある。つまり、発見されたものに100年の差がある、というだけなのか、利用の実態に100年の差がある、と考えるか、ということである。

このどちらか、にわかには判断しがたい。前者の立場をとる東野治之氏は、仏教の伝来に伴い国内に文字文化が急速に広まり水準も高まったと考えられること、寺院の造営や経営は単純な個々の技術の積み上げではなく、それらを全体として管理・運営する体制が必要であること、そして実際に法隆寺本尊台座墨書などから、上宮王家周辺で後代の律令的行政運営に通じる機能的な家政運営が行われていたことを指摘し、当該期の日本でも木簡が盛んに利用されていたことを想定する[13]。

ただし、今日に至るまで日本で6世紀代の木簡は出土していない。また、日本で出土している最も古い時期に属する木簡と、城山山城木簡の間には決定的な差が存在している。それは、東野氏が注目した一つの要素である、運営体制・システムの存在である。

城山山城木簡は、よくに整った書式を持つ。また記載内容も、負担者の個人名記載が見られるなど、詳細である。また、そこに記された地名は洛東江流域の地域であり、そうした地域から最前線の城山山城へと物資が運ばれたことに対応している。遠隔地間での物資の移動や集積に際して、統一的な書式に基づく詳細な記載をもった荷札が添付されている状況から、その背後に帳簿を軸として体系化された収取・支配体制が存在していたことは想像に難くない。城山山城木簡から垣間見られるのは、新羅全土（フロンティアは別としても）を覆う帳簿などを背景とした統一的な支配体制と、その構成要素としての木簡使用、という状況である[14]。

一方、日本木簡の最古期と目される木簡のうち、例えば難波宮出土木簡をみると[15]、整った書式は確認できず、人名や品目のみを記した「付札」などが主体である。城山山城木簡が背景にもつような体制・システムは見て取れない。日本木簡の最古期に属するものは、いず

れも単発的な木簡としての様相が強く、大きなシステムの一環としての位置づけがなかなか見えてこない様に思われる。

翻って、8世紀代の木簡を考えると、それらはいずれも律令制支配という大きなシステムの一部を構成するものである。荷札木簡も帳簿を軸として行われる支配体制の手段として使用されるものであるし、宮内で用いられる文書・帳簿もまた律令文書行政の一環に組み込まれていることは言うまでもない。単に、物品名称を示せば良いような木簡とは異なる、大きなシステムの構成要素という特徴こそ、古代木簡が他の時代の木簡よりも歴史的資料としての魅力に富む理由の一つであろう。こうした観点から見れば、日本木簡の最古期に属する木簡は、まだこの特徴を身につけていない。一方、城山山城木簡は、すでにそうした特徴が色濃い。

すくなくとも、出土例から見る限り、確かに100年の差は歴然として存在する。そしてそれは、帳簿の利用なども含めた支配体制が新羅と日本で大きく異なっていた、ということを意味するように思われる。確かに、東野氏の指摘の様に、上宮王家などではそうした管理運営体制が成立し、運用されつつあった可能性は十分に考えられる。すこし時代が降るが、『日本書紀』大化元年（645）七月戊辰条で、任那の調と百済の調を区別するために「可具題国与所出調」という記載が見られる。これなどは、日本側に任那の調とすべき範囲のリストがあって成り立ち得るとも考えられるので、帳簿を軸とした支配体制と見られないこともない。ただ、そうしたシステムの成立と運用は先進的な経営形態をとる一部の王家やミヤケ、寺院にとどまっていたのではないだろうか。全国規模でなかったからこそ、日本では6世紀に遡る城山山城のようなタイプの木簡の出土が見られないのではないかと思う。

では、日本で七世紀後半以降、爆発的に木簡が増大するのはなぜか。律令的支配の発展が背後にあることは、明らかであるが、もう一つ大きな条件があったと考える。支配制度・システムは、運用されてこそ意味がある。制度だけが制定されても、運用されなければ行政機構は活動できないし、軍事的行動も不可能である。当然収取も行えない。制度を背景に、それをしっかり運用して実社会での効力を発揮させるという能力が必要である。

特に、木簡は、紙の帳簿よりも「動いた情報」を扱う傾向にある。例えば、日常的な伝票は、まだ確定して帳簿に記載されない段階の情報の伝達に用いられるものである。こうした木簡の運用には、より現実に対応しながら機能する必要があるから、さまざまな「ノウハウ」が必要である。つまり、木簡を使いこなすには、文字が書けるだけでも、木が削れるだけでも、律令法を知っているだけでも不十分で、そのシステムの運用に関する実際的なノウハウが、必要不可欠なのである。だから、城山山城の木簡を、かりに古代日本人が知っていても、すぐに真似はできない。ノウハウを持つ人間が少なければ、そうした制

度やシステムの実際的な運用は、一部の王家や寺院などにとどまらざるを得ない。

実際的なノウハウの、大量の移入契機として考えられるのは、やはり百済滅亡であろう。百済遺民が日本古代国家成立に果たした役割は、つとに説かれているが、木簡を利用した実態的な支配体制構築という観点からも彼等の存在は無視できないと考える。扶余出土木簡に見られる運営状況と日本古代の支配体制の類似、さらには百済末期に属する伏岩里遺跡出土木簡と日本木簡の加工法や字形に至るまでの近似性は、行政システムの一部たる日本古代木簡成立に果たした百済遺民の役割を語って余りある。そして、日本古代木簡が、こうした成り立ちを持つからこそ、百済木簡文化とは別の文化をはぐくんだ新羅木簡とは、様々な面で違いが生じたのではないだろうか。

Ⅳ．おわりに

以上、雑駁ではあったが、百済・新羅のそれぞれの木簡文化の存在を想定し、古代韓国で木簡が盛んに利用されていたであろうことを述べた。また、日本古代木簡はそうした木簡文化のうち百済の系譜を引くこと、また木簡の体系的運営には帳簿をはじめさまざまなノウハウが必要であり、そうしたノウハウや支配体制・システムの成立の遅れが日本木簡の遅れであり、またその成立の契機が百済滅亡である可能性を述べた。最後に、木簡の形態をめぐって少し補足しておきたい。

韓国で、髄を有する木簡が多いのは、やはり用材による理由が大きいのではないだろうか。百済木簡の系譜を引く日本木簡では、髄を有する木簡がほとんど見られないことからも推測できるように思う。あえて多角形の木簡を多用したというより、木材の事情で多角形にせざるを得なかった場合が多かった可能性を想定しておきたい[16]。

日韓の古代木簡の共通点と差異は、支配体制の段階、システムの違い、さらには用材にまつわる条件＝自然条件など多くの点にまたがる。日本の地方木簡と韓国木簡が類似する、という指摘についての検討など、実力不足で行えなかったが、これも単純に両者が似ているというような見方ではなく、もうすこし様々な要素・角度から観察する必要があるように感じる。研究を進めていきたいと思っている。

謝　辞　本稿は、訪韓中多くの方々にお世話になった成果に依っている。朴晟鎮氏・車順喆氏をはじめとする大韓民国国立文化財研究所の先生方に心より御礼申し上げ、また成果を十分に咀嚼しきれていない点をお詫び申し上げます。

註

1　近年の日本における韓国木簡の研究成果がまとめられたものとしては、朝鮮文化研究所編『韓国出土木簡の世界』雄山閣、2007年、工藤元男・李成市編『東アジア古代出土文字資料の研究』雄山閣、2009年などがあげられる。

2　木簡文化という語を使っての議論としては、尹善泰氏が多面体木簡を特徴とする「韓国木簡文化」を提唱されてる。氏の見解については後に触れる。

3　こうした木簡の作法を考える上で、例えば佐藤信氏が提唱する「書写の場」というような視点は有効で、重要であろう。また、日本古代の荷札作成の作法を検討し、支配制度の中での役割を論じた、拙稿「荷札と荷物のかたるもの」（『木簡研究』第29号、木簡学会、2008年）がある。

4　尹氏の指摘など。

5　橋本　繁「金海出土の論語木簡」朝鮮文化研究所編『韓国出土木簡の世界』雄山閣、2007年、など。

6　国立昌原文化財研究所編『韓国의 古代木簡』国立昌原文化財研究所、2006年、15・18・40・48など。なお、以下韓国出土木簡については、原則として同報告書の番号による。

7　酒井芳司・馬場基「木片の調達環境と木簡」『木簡研究』第26号、木簡学会、2004年）。

8　橋本　繁「慶州鴨雁池木簡と新羅内廷」朝鮮文化研究所編『韓国出土木簡の世界』雄山閣、2007年。

9　尹善泰「木簡からみた漢字文化の受容と変容」工藤元男・李成市編『東アジア古代出土文字資料の研究』雄山閣、2009年。

10　三上喜孝「韓国出土木簡と日本古代木簡－比較研究の可能性をめぐって－」朝鮮文化研究所編『韓国出土木簡の世界』雄山閣、2007年。

11　橋本　繁「城山山城出土木簡と六世紀新羅地方支配」工藤元男・李成市編『東アジア古代出土文字資料の研究』雄山閣、2009年。

12　拙稿「百年の理由」（『木簡研究』第31号、木簡学会、2009年）で、見通しを若干の見通しを述べた。

13　東野治之「古代日本の文字文化－空白の六世紀を考える」国立歴史民俗博物館・平川南編『古代日本　文字の来た道』大修館書店、2005年。

14　橋本　繁「城山山城出土木簡と六世紀新羅地方支配」（前掲註11）。

15　江浦　洋「大阪・難波宮」（『木簡研究』第22号、木簡学会、2000年）で紹介されている内容に基づいて検討した。

16　東野治之「巻頭言－情報化と松と檜－」『木簡研究』第24号、木簡学会、2002年。

挿図出典

第1図　1　国立昌原文化財研究所『韓国의 古代木簡』2004年、p. 152。

2　同、p. 172

3　同、p. 174

木簡 作法과 100년의 理由

馬場　基 (바바 하지메)

요　지　한국 고대 木簡의 특징으로 보고 있는 多角柱・棒狀 木簡에 대하여 검토하였다. 木簡의 形狀・加工과 문자의 기재 방법을 관찰하면, 통상적으로는 문자를 書寫하기 위해 '面'을 만들어 내는데, 면을 만들지 않는 木簡이 존재하는 점, 그러한 円柱狀 木簡에서 문자 기재 행수가 많은 木簡에는 공통된 加工이나 形狀적 특징을 볼 수 있는 점(円柱狀으로 마디를 지닌, 길이 20cm이상으로 비교적 굵다)을 지적할 수 있다. 출토 정보나 기재 내용으로부터 이러한 마디를 가진 円柱狀 木簡이 신라 왕의 신변 가까이에서 쓰였던 木簡으로, 음성이 문자화되는 장면에서의 이용되었음을 가정할 수 있는 것도 지적하였다. 그렇다면 이러한 多角柱・棒狀 木簡 가운데, 가려 쓰는 것으로부터 신라 木簡 문화의 존재를 상정하고, 또 대비되는 점으로서 백제 木簡 문화의 존재도 상정하였다. 고대 한국에 이와 같은 성숙된 木簡 문화가 존재했다는 것을 지적하고 나서, 일본 고대 木簡과 비교하였다. 木簡은 行政・支配・收取 시스템의 일환, 또는 도구로 기능하는 것이며 단독으로 쓰이는 것은 아니다. 木簡의 사용은 그러한 시스템 운용의 노하우가 있고서야 가능하게 된다. 일본 고대 木簡의 본격적 전개가 한국보다도 크게 늦은 점은 이와 같은 시스템・制度의 정비 상황이나 노하우의 축적 차이에 의한 것이라고 생각해 보았다.

주제어：　木簡　신라　백제　일본　木簡文化

Uses of *Mokkan*, and a Lag of 100 Years

Baba Hajime

Abstract: Round and polyhedral columnar *mokkan* (wooden documents), forms held to be characteristic of ancient Korean *mokkan*, were examined. From observations of the shapes and woodworking, and the methods of inscription of these items, it can be pointed out that while flat surfaces were ordinarily prepared for writing characters, there are some lacking such surfaces, being the cylindrical *mokkan*, and that among the latter are items bearing many lines of text which share characteristics of shape and woodworking (being cylindrical in form but bearing natural knots in the wood, slightly more than 20cm in length, and relatively thick). From the archaeological contexts and the content of the inscriptions, these knot-bearing cylindrical *mokkan* may be inferred to have been used near the person of the Silla king, when transcriptions were made of oral statements. From the differential utilization among these polyhedral and round columnar *mokkan*, the existence of a Silla *mokkan* tradition may be presumed, along with a Baekje tradition in contrast to this. After pointing out the presence of these mature *mokkan* traditions in ancient Korea, comparison was made with *mokkan* of ancient Japan. *Mokkan* functioned as vital parts or tools of the systems of administration, governance, and taxation, and were not items used in isolation. The use of *mokkan* becomes possible only with knowledge of how to operate these systems. That full-scale development of *mokkan* in ancient Japan lagged greatly behind Korea is thought to be due to different conditions in the implementation of these systems, and the accumulation of knowledge they required.

Keywords: *Mokkan* (wooden documents), Silla, Baekje, Japan, *mokkan* traditions